

六甲山の災害展について (その一)

六甲治山事務所

平成九年は過去の大規模な六甲山系土砂災害（昭和十三年、昭和四二年）から六十年、三十年を迎える節目の年となります。

本年林務課の山本宗生氏から昭和十三年災害の被害状況をあらわす多数の貴重なスケッチの寄付を受けたのを契機に、梅雨を迎えた平成九年六月二日からJR三宮駅のフェニックスプラザで、これらのスケッチをはじめ、関係機関が所有する過去の大災害の資料、六甲山の緑化の歴史など県民の方々に見ていただき、六甲山の災害の恐ろしさの再確認と、大雨に対する心構えを養っていただく目的で展示会を開催しました。

展示の様子は新聞、テレビなどでも紹介され、多くの方が会場に来られました。会場では、実際に被災された多くの方々にお話を伺うことが出来、我々防災を担当する者にとっても貴重な体験となりました。昭和十三年災害、戦災、地震と自分の一生の間に三度も家を失われた年配の方の体験談は印象的でした。

今回から「やまなみ」の紙面をお借りして、六甲山の災害展の紹介をさせていただきます。

日時 平成九年六月二日～六月二十九日
場所 阪神・淡路大震災復旧支援館

(フェニックスプラザ)

主催 神戸大学・建設省・農林水産省
兵庫県・神戸市

六甲山の災害展について

神戸大学都市安全研究センター

沖村 孝

私たち市民ができる災害対策には二つの考え方があります。

一つは、地震とはどのように揺れるものか、山崩れとはどんな時に発生して、どのように土砂が移動するものかというように、出現する現象とその大きさを、概念としてあらかじめ知ることです。

もう一つは、緊急時に自分の身を守るためにはどうするのかという対応や、避難訓練をすることです。

そういう二つの側面から、我々は自分の身の安全を守ることが出来ます。豪雨や地震で経験したことを次世代に語り継ぎ、経験や体験を風化させることがあってはならないと思います。

六甲山は東西方向の力を受けることよって盛り上がり過ぎてきた、急峻な斜面の山です。山中にはたくさん断層が発達し、その影響で六甲山を構成している御影石（花崗岩）は、地下の深いところでも風化していて、もろくなり、いわゆる深層風化が進行しています。神戸のまちは六甲山の山麓に近接して広がっているため、大雨が降ると風化した土石が崩壊し、急な斜面を一気に流出するため、大災害を起こしやすい条件にあります。

気象の歴史を見ると、周期的に大雨が降る傾向にあります。過去の災害の歴史から、六甲山の災害は約三十年に一度の割合で発生しています。

約六十年前の昭和十三年には、阪神大水害が発生しました。バケツをひっくり返したという表現がぴったりする一時間に三十mmを越える激しい雨が四時間も続き、総降雨量が五百mmを越える大雨が降りました。市街地では、川沿いに広い面積で浸水し、約五百万立方メートルの土砂が出て六一六人の死者を出しました。

三十年前の昭和四二年には、一時間に七十mmを、一日に三百mmを越える大雨が降りました。六甲山系では、三、七五〇か所の山崩れが発生し、約二三〇万立方メートルの土砂が流出し、九一人の方々が亡くなりました。

今回の地震でも六甲山系では、崩壊が発生しましたが、斜面には地震動で緩んだ表土層が残っています。このため、地震後の降雨でも崩壊が発生しています。今後も大雨が降れば、土砂災害が発生する危険性があります。

行政が行うダム工事などのハード対策のみでは、災害を防ぐには限界があります。最初に述べましたように、災害を防ぐのは、やはり住民一人一人の備えがなくてはなりません。

このたびの展示会で、六甲山で起きた過去の災害の大きさを知っていただき、六甲山の危険性を再確認していただくとともに、大雨が降ったらどのように行動するか、あらかじめご家庭で話し合っていたく機会となることを祈っています。災害の経験や体験を風化させないために……。